

看護学生に対する模擬患者を用いたコミュニケーション技術教育の検討：演習終了後のレポート内容の分析から(1)

大池, 美也子

村田, 節子

<https://doi.org/10.15017/273>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 26, pp.67-72, 1999-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン：

権利関係：



看護学生に対する模擬患者を用いた コミュニケーション技術教育の検討

— 演習終了後のレポート内容の分析から — (1)

大池 美也子 村田 節子

A Study on Training of Communication Skills by Using Simulated Patients : Through Analysis of Nursing Students' Reports (1)

Miyako Oike, Setsuko Murata

The educational program of using simulated patients to develop communication skills for nursing students have widely been accepted because of its various advantages. A simulated patient is a healthy person, but required to state the histories of illness (present or past) or family, habitual and social circumstances, and to play a role of actual patients physically or emotionally.

To elucidate educational effects and further problems of this procedure, we have reviewed seventy-nine nursing students' reports, which were offered after completing the program. Nursing students recognized the importance of the favorable relation to patients, and this result could be achieved by the practice using simulated patients.

Therefore, we need to accomplish an educational system for nursing students to cultivate communication skills by taking account of the developed steps of students in accordance with responded information from simulated patients.

はじめに

コミュニケーションは、あらゆる看護行為に含まれているとともに、看護実践の基盤となる人間関係を成立・発展させるための援助技術である。しかし、看護におけるコミュニケーションの内容には、多様な要素や種類あるいは特性があり、複雑化している。さらに、このコミュニケーションは一般的(日常的)コミュニケーションと治療的コミュニケーションに分類され^{1),2)}、後者の意図的・計画的な援助方法が看護実践の視点から今日重要視されつつある。

看護におけるコミュニケーション技術の教育は、基礎看護教育の中に位置づけられており、その教育方法は、対象との直接的な関わりの中で身につけていく体験学習が大部分を占めている。例

えば、ロールプレイング^{3),4)}やニューカウンセリング⁵⁾などの多彩な取り組みである。明智⁶⁾や北川⁷⁾は、このような技術教育の現状を「模索期」とし、コミュニケーション技術の効果的な教育方法が確立されなければならないことを指摘している。

模擬患者 (Simulated Patients: 以下 SP と省略)⁸⁾による教育方法は、今日学会^{9),10)}や文献^{11),12)}などで紹介され、次のような利点をもつ。①問題解決的である、②現実的である、③総合的である、④動機づけになる、⑤能動的・参加的である、⑥安全である、などであり、さらに患者がどのように感じ、どのように理解したかを直接学ぶことができる。しかし、看護学教育の中で SP 導入やその学習効果を検討した授業研究や実践例の報告は少ない^{13),14)}。

本研究の目的は、基礎看護教育のコミュニケーション技術教育にこのようなSPを活用し、それによる学習効果と今後の課題を明らかにすることである。

研究方法

1) 研究対象

SPによるコミュニケーション授業の演習に参加したK大学医療技術短期大学部看護学生79名によって記述されたレポート内容。

レポートテーマは、「本演習からの学び(気付いたこと, 感じたこと, 考えたこと)」と「模擬患者による演習をどのように思うか」とし、演習終了後1週間以内にレポート提出とした。

レポート内容の分析と本研究への協力については、口頭により看護学生の了承を得た。

2) レポート内容の分析方法

分析の視点となるカテゴリーの内容は、以下のような看護技術教育関連図書を参考にし、「コミュニケーションの概念」、「コミュニケーションの技法」、「コミュニケーションへの印象」に大別した。

- ① 薄井坦子他:『基礎看護技術』, 医学書院, 1998
- ② 内藤寿喜子他:『基礎看護技術』, メヂカルフレンド社, 1998
- ③ 『コミュニケーション・スキル』, インターナショナルナーシングレビュー, 19(1), 1996

分析方法としては、レポートの記述内容を文脈として2名の看護教育経験者によって分析した。カテゴリーの抽出には意味内容の類似性に基づき

表-1 コミュニケーション技術教育の概要

回数	指 導 内 容
1	コミュニケーション「理論編」 ・コミュニケーションとはなにか ・コミュニケーション過程の構成要素 ・コミュニケーションの種類
2	コミュニケーション「理論編」 ・援助的技法としてのコミュニケーション(治療的コミュニケーション) ・面接の技法 ・コミュニケーション場面を振り返る方法(ロールプレイング・プロセスレコード)
3	コミュニケーション「実践編」 ・模擬患者による演習
4	模擬患者による演習のふりかえり カウンセリング的視点からとらえたコミュニケーションの方法

表2 SPによる演習の計画と経過

時間	演習項目	具 体 的 内 容	実 際 の 経 過 内 容
8:50	オリエンテーション	本演習における学習活動の説明	
9:00	ビデオ鑑賞	好ましくないコミュニケーション場面のビデオを提示し、学習の動機づけとする。	(ビデオ内容については省略)
9:20	グループ討議	ビデオ内容を振り返り、看護者と患者の立場の両者を評価・検討する	
10:00	グループ討議内容の発表	各グループ毎に検討した内容を模造紙に記述し発表する。	〈主な発表内容〉 看護者の立場: 巡回が雑・患者の立場になっていない・検査の内容を理解していない・冷たい・医師の指示にこだわっている・患者への関心がない・患者を無視している・話を中断している・自己中心的な計画を立てている, など 患者の立場: 検査などを具体的に説明してほしい・教えてもらいたい・話を中断されている・不安に思っていることを聞いて欲しかった・病気への自覚がない・看護婦に頼めばどうかなと思っている, など
10:30	グループ討議	看護者の立場からどのようなコミュニケーションが適切であるか各グループで対話内容を検討する。	
11:00	模擬患者による演習	代表者1名を選び模擬患者との演習を行う。他の学生は別の実習室にてテレビ画面を通じ演習状況を見学する。	(実際の演習内容については省略)
11:20	演習内容のグループ討議		
11:30	SPによるフィードバック		〈フィードバック〉 笑顔で心がなごんだ・6時に来るという返事で信頼できた・いかがですかというひとこともよかった・一生懸命さが出ていた・視線をわざわざ自分のほうを向いたので安心感があった・お店のことをいきなりいわれたのでびっくりした, など
11:40	本演習のまとめ	コミュニケーション技術は状況によって変わるため、演習内容への直接的なコメントを避ける。本演習参加に対する意義を補足する。	

分類し、意味内容がとらえにくい場合には前後の文脈から解釈した。

本コミュニケーション授業の概要

1) 本授業の位置づけ

コミュニケーション技術は、全ての看護専門領域の基礎であることから、1年次前期において実施されている。

本授業では、コミュニケーション技術を「理論編」と「実践編」に大別し、「理論編」ではコミュニケーションの概念と看護における治療的コミュニケーションに関する講義を、また「実践編」ではSPによる演習を計画した(表1)。

本授業の学習目標は以下の通りである。

- ① コミュニケーションの本質である「理解・共有」の具体的内容を言語化できる。
- ② コミュニケーションの技法を実践できる

2) SPによる演習の計画(表2)

本授業の対象となる看護学生は、ほとんど臨床経験のない1年生であるため、ビデオによる好ましくないコミュニケーションの看護場面(表3)を学習の導入として提供した。

ビデオ教材は本研究者が作製した。その内容には、対人距離や視線などの非言語的コミュニケーションあるいは傾聴しない対応など、批判的对象となる場面を意図的に設定した。

結果

1) 本コミュニケーション授業からの学びに関する記述内容(表4)

「コミュニケーション技法」が79名中74名(93%)で最も多く、「コミュニケーションの概念」が66名(83%)、また「コミュニケーションへの印象」が38名(48%)であり、以下「授業・演習への意見」が34名(43%)、「学習の動機づけ」が16名(20%)、「看護職者としての自覚」が16名(20%)であった。さらに「コミュニケーション概念」の中で、「他者への影響」に関する記述が45名(57%)であり、「コミュニケーション技法」の中では「傾聴・共感」の記述が54名(68%)であった。

2) SPを用いた授業への評価(表5)

79名中74名(93%)がSPによる演習を肯定的意見として記述していた。しかし、肯定的意見の74名中11名(13%)に「自信がない」という記述があり、また「自分がするのはいや」という記述が2名(2%)であった。さらに肯定的意見の74名中、「患者の気持ちが聞ける、指摘をうけることができる」などSPのフィードバックに関する記述が59名(74%)であった。

考察

1) SPのフィードバックによる学習効果

本演習によって明らかになった学習効果は、コミュニケーションによって対象が変化することへ

表3 設定した看護場面

項目	内容
患者の背景:	Y氏女性60歳代、外科病棟に入院3日目 集団検診を受けたところ、胃癌の疑いがあると指摘され精査のため入院した。検査結果を待つとともに、病院での検査が引き続き行われていた。夫は30代にて他界し、夫が残した八百屋を営みながら長男・次男の二人の子どもを一人で育ててきた。長男・次男は独立している。八百屋はY氏が入院のため長男の嫁に頼んだが八百屋の状態が気になり、帰ることを希望している。 短気な性格であり、自分でなんでもする。
看護者の背景:	M看護婦 経験豊富な看護婦、40歳代、準夜勤務
看護場面:	M看護婦は、手術後の患者がまもなく病棟に戻ることに、個室の患者は呼吸器を装着しており頻回な吸引操作が必要であるなどの申し送りを受け病室の巡回を始めた。またY患者については八百屋のことが気になっており、自覚症状もないため自宅に帰りたく医師に相談するが検査のためにだめであること情報として得ていた。

表4 コミュニケーション授業に対する記述内容(各数値は複数回答による)

番号	カテゴリー	記述人数(%)	主な記述内容
1	コミュニケーションの技法	74名(93%)	わからないことはわからないという。うやみにしない・正直にいう・うそをつかない いろんな技法がある(言い替えなど)・婉曲な話し方・挨拶をする・質問・名前を呼ぶ 納得できる説明をする・わかりやすく説明する・詳しく教える 声の大きさ・落ちついてゆっくりと話す口調・明るい声 聞く余裕が大事・最後まで聞く・話を中断しない・妨げない聞くことすること
	1) 言語的コミュニケーション	< 69名(87%) >	
	曖昧な会話をしない・確かな会話	36名(45%)	
	ことばの大切さ・表現の工夫	24名(30%)	
	説明のしかた	21名(26%)	
	話し方	10名(12%)	
	2) 共感・傾聴	< 54名(68%) >	
	3) 非言語的コミュニケーション	< 52名(65%) >	
	身振り手振り、体全体、表情	40名(50%)	
	視線	34名(43%)	
位置関係・距離	18名(22%)		
タッチング	3名(3%)		
2	コミュニケーションの概念	66名(83%)	安心感が出てきた・ちょっとした態度で患者の気持ちが変わる・患者への影響
	他者への影響	46名(58%)	
	コミュニケーションの条件	28名(35%)	
	他者への思い・相手の立場	26名(32%)	
	信頼関係・人間関係の形成	23名(29%)	
	自己理解、自己への気付き	10名(12%)	
	患者の個性	8名(10%)	
	相互作用	5名(6%)	
	看護者からのコミュニケーション	5名(6%)	
	積極的に話しかけ相手の話を聞くことが大事・患者の対話の場を多く持ち相手の意見に耳を傾ける		
3	コミュニケーションへの印象	38名(48%)	基本的行動の難しさ・患者と話すのは外国人と話すことのように難しい
	難しさ・大変さ	25名(31%)	
	重要性・大切・看護に不可欠	13名(16%)	
	奥が深い	2名(2%)	看護上でもっとも重要・看護に関わるものとして絶対不可欠 コミュニケーションの奥の深さがわかった
4	授業・演習に対する評価	34名(43%)	うまい・あなたのような看護婦と・最初のビデオでは看護婦が冷たい
5	学習の動機付け	16名(20%)	常日頃の態度が大事・いろいろと勉強しよう・反省したことを次にいかす
6	看護職者としての自覚	16名(20%)	精神面のケアもできるように・この看護婦さんならといわれる様に信頼される看護婦に
7	看護業務との関連	4名(5%)	忙しい中に時間を確保することも看護婦の技術・巡回のたいせつさ・看護婦の計画性

表5 模擬患者を用いた授業に対する学生の評価

1. 模擬患者による演習への賛否	記述人数(%)
肯定的賛成(良い・ためになるなど)	74名(93%)
肯定的賛成のうち・不安になった・自信をなくした	11名(13%)
否定的意見(大切だが自分がするのは怖い・自分がするのはいや)	2名(2%)
特に記述なし・不明	3名(3%)
2. 理由(肯定的意見74名中)	(各数値は複数回答による)
患者の気持ちが聞ける・指摘をうけることができる	56名(70%)
慣れる・実習前に必要・経験がある	16名(20%)
自分だったらと考えた・考えることができる	13名(16%)
現実に近い・緊張感がある	12名(15%)
自分もやってみたい・楽しかった	8名(10%)
何度も繰り返してみることができる・模擬家族を創る	7名(9%)
練習台としての特徴(失敗しても許される・安心して練習できる)	5名(6%)

の気付きである。記述内容によると「患者は、看護婦の態度、コミュニケーションで対応も変わるし気持ちも変化する」、また「看護婦と患者の距離だけでも目を見て話をするだけでも、患者は落ちつき、安らげる」などである。このような気付きは、演習前のビデオとSPによる演習内容との比

較、またSPによる「笑顔で心がなごんだ」などのフィードバックによるものと考えられる。ビデオ及びSPの演習の中で、SPの表情や言葉は全く異なっている。SPの反応が異なるという学習の視点は、動的な人間関係を基盤とする看護におけるコミュニケーションの特殊性や専門性の理解に通じるものといえる。さらに、SPがフィードバックとして表現した安心感や信頼感は、コミュニケーションがもたらす患者への影響である。SPのフィードバックの内容から看護学生34名(43%)が笑顔をコミュニケーション技術の一つとして注目している。他者へ影響するコミュニケーション技術は、専門職としての意図的・計画的なコミュニケーション技術への気付きであり、SPによる演習の効果としてとらえることができる。

通常行われているコミュニケーション技術の主な教育方法はロールプレイングであり、看護学生

は他者の立場になることや良き聞き手になることに集中する。しかし、この方法は、与えられた役割を実際に経験していない者が演技をすることは困難であり、当事者の心理的負担が大きいともいわれている^{15) 16)}。本演習では、1名の看護学生が役割演技を実施したが、それを通じて、SPによるフィードバックの内容を他の看護学生は次のように捉えている。「自分の話し方や行動が患者の目にどのように映り、患者の気持ちにどのような変化を与えているかが分からないが、模擬患者だと意見が聞けるので自分が次回からどうすればよいかということを考えさせられる。」あるいは「患者さんの意見を聞くと、こういう考え方もあるんだなあとか、あの言葉はこんな風にとらえられているのかと、違った見方ができました」などである。看護学生は演習状況を自分の立場に置き換えた思考を展開しているとともに、フィードバックの内容から他者のさまざまな考えかたにも気付いている。SPのフィードバックは、役割演技に集中することなく、自己の振り返りと他者理解への学びを深めるものとする。

2) SPを用いた演習の教育的課題

本演習において、SPのフィードバックに対する期待と影響が看護学生に大きいことが明らかになった。フィードバックは演習終了直後にSP演習の協力者とSPとの間で、その内容を検討している。しかし、演習全体に対するフィードバック内容の位置づけやそれがもたらす教育的影響については検討しておらず、SPによる演習の今後の課題と考える。

また、コミュニケーション技術習得の過程は、一般に前述したような相手の立場になることや良き聞き手になることから始まる¹⁷⁾。自己理解と他者理解あるいは聞くことと話すことは、コミュニケーション技術の基盤である。しかし、本演習では、表4の「他者への思い・相手の立場」は26名(32%)、「自己理解・自分への気付き」は10名(12%)であり、この学習効果は高いといえない。

また、演習を受けた看護学生は、自己確立に向かう発達段階にあり、他者からの心理的影響を受けやすい年代にある。SPによる演習について少数

ではあるが、「不安になった」、「自信をなくした」あるいは「自分がするのはいや」などの記述があった。コミュニケーション技術の習得過程には、本演習のみならず実際に技術を活用する臨地実習の実践が含まれている。本演習によるマイナスの学習効果が、臨地実習における他者との関わりに影響することも予測される。SPによる演習では、看護学生の人格への影響を考慮するとともに演習内容を自己の課題として意識化できるよう教育的配慮を検討していかなければならない。

まとめ

基礎看護教育において、SPを用いたコミュニケーション技術教育を行い、次のような学習効果と今後の教育的課題を明らかにした。

- 1) 看護学生は意図的・計画的な専門職としてのコミュニケーション技術に対する気付きを深めた。
- 2) SPのフィードバック内容に対する看護学生の期待と影響が大きい。
- 3) SPのフィードバック内容と看護学生の発達の特徴とを考慮したコミュニケーション技術の教育計画を組み立てていく必要がある。

おわりに

本演習は、あくまでも学校内での演習であり、実践場面での学習効果を確認していない。本演習による学習効果を臨地実習での実践場面で明らかにすることを今後の課題とし、SPを用いた教育方法をさらに検討していきたい。

なお、本研究は平成10年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトの補助を受けた「医療における人間関係の教育に関する研究」の一部である。

注および引用文献

1. Eleanor C. Hein, 助川尚子訳:看護とコミュニケーション, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京, 1993
2. 高崎絹子他:コミュニケーションの概念と看護への適用, インターナショナルナーシングレ

- ビュー, 19(1): 9-14, 1996
3. 伊藤好美他: コミュニケーションに関する教育方法について, 日本看護研究学会雑誌, 12(4): 39, 1989
 4. 高鳥真理子他: 基礎看護技術教育におけるコミュニケーション技能の訓練, 福井県立大学看護短期大学部論集, 2: 29-39, 1995
 5. 池田紀子: 看護学生へのコミュニケーション理解のための授業, 保健の科学, 29(9): 588-592, 1997
 6. 明智麻由美他: 看護基礎教育課程におけるコミュニケーション教育に関する研究, 日本看護研究学会雑誌, 20(3): 223, 1997
 7. 北川かほる他: 看護としてのコミュニケーション技術の教育の動向, 日本看護学教育学会誌, 4(2): 32-33, 1994
 8. 模擬患者は Simulated Patients, または Standardized Patient と呼ばれている。藤崎 (藤崎和彦: アメリカの医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論, 看護展望, 18(8): 892-896, 1993)によると, 前者は実際の患者と同じように演じることに力点がおかれているが, 後者は単に SP が症状や心情をシュミレーションするのみではなく, 一定のレベルでの標準化された試験や評価として活用される SP を呼ぶとして, 区別されている。本研究では, 前者の意味での SP をいう。
 9. 大滝純司: 模擬患者 (SP) による医療者のコミュニケーション技能教育, 日本看護研究学会雑誌, 20(3): p.85, 1997
 10. Anderea Baumann, Robin Wein : An Educational Methodology - Standardized Patient -, 日本看護学教育学会誌, 7(3): 55-69, 1997
 11. 大滝純司: 模擬患者を使って, 中川米造他編: 良い医者育てる, 現代のエスプリ, 313: 134-144, 1993
 12. 大滝純司: 日本の看護教育への模擬患者導入の意義, 看護展望, 18(8): 897-899, 1993
 13. 白浜雅司他: 模擬患者を用いたインタビュートレーニング, 看護教育, 37(4): 271-275, 1993
 14. 堀江三恵子: 模擬患者参加のコミュニケーション演習の効果, 神奈川県立看護教育大学校紀要, 19: 33-41, 1996
 15. David Pulsford: Reducing the threat; an experiential exercise to introduce role play to student nurses, Nurse Education Today, 13: 145-148, 1993
 16. Debbie Bayntun-Lees: Setting the scene for experiential learning, Nursing Standard, 36(7): 28-30, 1993
 17. 一戸とも子他: コミュニケーション技術の向上を目指した指導とその効果, 看護展望, 14(8): 69-76, 1989